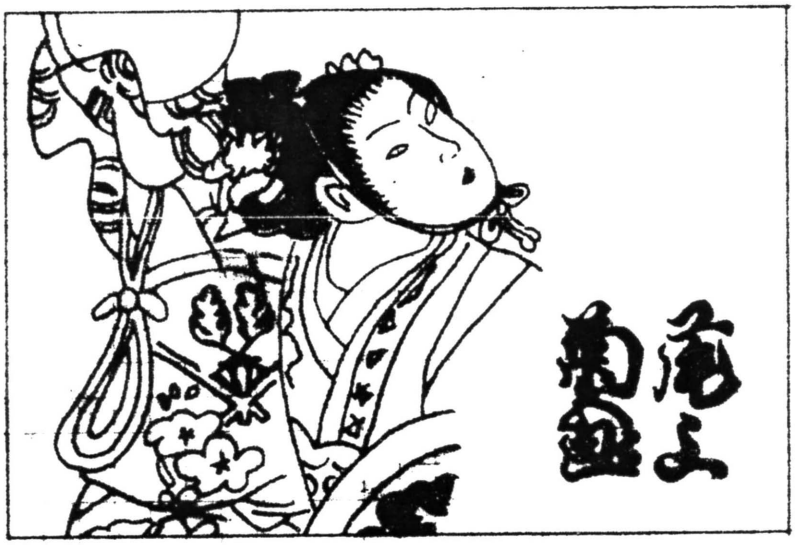
はまゆうと櫻貝と
海光るわが故里

鶴沼

昭和六十年三月号
通巻第二十五号

鶴沼を語る会



嘉永五年 鳥居清満筆「鮫見世為付」より 市立博物館

明日香に遊んだ思い出

冨士　山（たかし）

京都の伏見区に、秀吉晩年の行事として有名な醍醐寺三宝院がある。

その隣の柴橋氏は民間の風流人で、無庵と称する茶室を有する。外国人などが民間の茶室を知りたいとて京都市役所に尋ねると、市役所は醍醐にある無庵を紹介する程のところである。

私が訪れたころは、庵主はすでに死亡し、未亡人と孫娘二人住まいだった。現主人は私より三十ばかり若い方であるが、職業上で私と極く懇意であり、その方の本店は横浜市内にあるが、支店は京都にあるので是非京都の無庵へ遊びに来てくれ、京都市内はもとより奈良もどこでも好きなところへ案内するというので、四、五度も無庵を訪れた。

さすがに名立たる茶人の住まいとて、入口の門は一見甚だ平凡な小門に過ぎないが、家は草ぶきの平家、茶室や控え室など完備している。

最初に訪問した時は奥の正座敷に招かれ。そこには、無庵と書いた大きな額がかかげてあった。ここで主人と共に食事したり、夜は一緒に寝たが、すぐに家族のお二人と親しくなり、食事も家族室で一緒にやり、雑談を交わす間柄となった。

庭は広く茶人風に仕立てられ、隣の三宝院の塔の上部が林越しに見える。そこからずっと離れて醍醐山の峰々が眺められ、誠に茶人の家らしいたたずまいであった。

二十余年前の四月半ばすぎに明日香を見物することとなった。当時朝九時頃柴橋家を出発した。車は柴橋さん自身運転し、車内には私の外に柴橋邸を管理する画家が同乗した。

奈良市や天理市は素通りして、車は一路南

に向う。お昼頃になったので「みわ」と書いてあるスナックで食事することになった。私は、ああ、みわそうめんのあの「みわ」かなと思った。なにげなく東の方を見ると、円頂で左右対象的な余り高くない山が前方に見える。さらにその奥の方には幾分高い山山がつづいている。周囲は緑の木立がつづき、何ともいわれめ眺めであった。

ああ、これが三輪山だ、三輪山だと直感した。そうして思わず口に出たのは、額田王の万葉十八番歌であった.『三輪山をしかもかくすか雲だにも情あらなむ隠そうべしや』であった。

案内の主人や画家は万葉集には余り関心なく、無言で食事をしているが、私は食事を忘れて十八番歌をくりかえした。

ついでであるが、十八番歌は額田王が大和を去るときに歌ったもので、この歌の意味について二、三の説があり、一派の人はこの景色麗しい三輪山とわかれることの悲しみを訴えただけのこととする事に対し、反対者は、いや三輪山とは大海人皇子を指し、雲とは天智天皇を指すなどいう者もあるが、私は十八番歌の本歌を見ると

『味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の
　山の際に　い隠るまでに　道の隈　い積る
までに　つばらにも　見つゝ行かむを　しば
しばも　見さけむ山を　情なく　雲の隠さふ
べしや』

を吟味すると、額田王は生れてずっと今日まで愛しつづけ、詩情を育ててくれた明日香を去り、その北端ともいうべき三輪山まで来て、これから先はもう明日香を眺められぬ所まで来て、明日香との別れだと知り、額田王が口にした歌だと私は信じ、大海人皇子がどうの、天智天皇がどうのという説には反対である。

額田王の姉の鏡王女の墓は、三輪市の東方二キロ位の忍坂という所の畑の中に立っていた。それより約百米のところに舒明天皇の陵

が見えたが、時間の都合で詣らなかった。
　忍坂から車を西に向け、明日香村に来たのは夕方近かったので村長の家に一泊させてもらった。
　さすが村長の家だけあって木柱も立派な構えであり、夕食も結構、寝具も立派であった。翌朝起きて見ると、棟つづきの離れもあり、庭園も相当なものであった。ただ一つ驚いたことは、洗面するとき洗面器をのせる台がなく、地べたに洗面器を置いて顔を洗ったという次第で、これがこの地方の習慣かと思われた。
　村長の家を出て先ず甘橿丘に登ると、眼の下には飛鳥川が流れており、北方には香具山や耳成山が見られ、少し西方に畝傍山が眺められた。
　案内図を持っていないので、ぐるぐる廻りや後戻りなどして園寺、川原寺とか有名な寺を拝見したり、ある御殿の跡といわれる円形の石が並んでいる所を見たり、或は明日香川原宮の跡が小学校と隣りあっている所を拝見した。それから飛鳥の大仏さんのあるお寺を拝見した。寺が割合に小さいので大仏さんが窮屈そうであった。それから鬼の俎板とか石舞台などを見物し、南方かなりはるかな処に、天武、持統両帝の御陵が見えたが、参拝する時間がないので、西方橿原へ向つた。
　一般の観光客はこの辺へ来ても壺坂へゆく人は滅多にないようだ。私が大学にいた頃、名は今忘れたが何ともいえぬ美声で、しかも器量のよい四十才過ぎた女義太夫が壺坂を唄うのを今でもかすかに覚えている『三つ違いの兄さんというてくらしたこなさんが、生れもつかぬ庖瘡で・・・・』が思い出された。
　橿原から正南方の相当の大通りを十キロ以上走り壺坂についた。それから車を左方にまげ割合に狭い道を右左に曲り走ると壺坂寺についた。観音様を伏しおがみ、これがお里が沢市の眼を治さんと毎晩ひそかに家出して願がけした観音様かと感慨深かった。
　それとは知らぬ沢市は、お里が毎晩家を出る

のを沢市の外に男でもできたのかとなじると、お里は、お前の眼を治さんとこの壺坂の観音様に毎晩願かけにくるのを、ほかに男があるのかなどはなさけなやと嘆く、沢市深くはじ、これというのも目くらの自分が生きているからだとて、或る日ひそかに寺の後のがけの上から深い谷へ身を投げると底へは達せずに途中の平地でとまり、そのとたんに両眼がぱっと開いて物が見えるようになったという物語である。

今日医学的には、沢市の眼は白内障であったのであろう。沢市がとんだはずみに両方の角膜が切れてよごれた水晶体が両方ともとび出したのだろうと解釈している。

壺坂寺を辞して前に来た道を逆に走って畝傍につき、さらに車を西方に四キロ近くゆくと当麻寺につく。

そこから北方へ出る割合に狭い道を行くと、西方にあの有名な大津皇子の墓所二上山がすぐ目の前に見える。

今は土地の人は無風流にニジョウサンと呼んでいる。

大津皇子の姉大伯皇女が『うつそみの人なる吾や明日よりは二上山をいろせとわが見む』と歌った山だ。

二上山にのぼって見たかったが時間がないので当麻寺へもどり、中城姫の宝物までも見ずに急ぎ帰途についた。

途中で食事し帰宅したのは夜の９時頃であった。

（昭和六十年二月始め記）

終戦後の鵠沼

――六代目のこと、椿荘のこと――

田中まさ子

私は自分の記憶の衰えないうちに、終戦後の鵠沼を書いておきたく考えていたが、なかなか書くに至らなかった。余り目まぐるしく変わって記憶もおぼろげになって自信を失ったが、誰かが書くであろうと待つより、まあ書いてみようと思い立ったのである。

この町は当時、半農半漁の土地の人に交り、所謂別荘もんが多く住んでいた。

京浜方面の大きな商家の家族、事業を持つ社長族の中に、療養のため貸別荘に住んでいる人達で町は成り立っていた。江の電や小田急で藤沢駅へ出て、東京方面への出入りがなされていたが、終戦と同時にまた新しい住人が増えた。

鎌倉より古い別荘地といいわれるが、粗朴さの残る郡びた海沿いの町には、まだ疎開人を受け入れる土地も家もあった。

東京が焼けて、思いがけない有名人と隣組のつき合いが初まった。

その中に六代目尾上菊五郎一家があった。

なぜ今になってあの頃を思い出したかというと、五十九年十二月七日に大川橋蔵が死去したからだ、五十五歳まことに惜しむに余る役者であった。

さわやかな江戸前の銭形平次を私は十八年

間も見つづけてきた。八百八十回という親しみは忘れられるものではない。

あれは昭和二十一年の年だったと思う。

菊五郎一家が江の電鵠沼駅の裏、境川のほとりに居を構えた。九郎右衛門一家も大川橋蔵も一緒だった。

私たち別荘もんは喜んだ。何しろ歌舞伎役者と同じ町内人になったのだから。まだその頃は、やっともんぺをぬいで夜も眠れるようになったばかりだった。

この間まで、土地のエライ酒やさん、八百やさん、魚やさん、植木やさん、米やさん等の指揮で、バケツを持って防空演習ばかりしていた。

女中さんはいないし、食料の買い出しにも行かねばならないし、もう別荘もんはヘトヘトになっていた。東海道線は決死のかくごで乗らなければならない。

そんなある日、藤沢駅でモミクチャになっている中に、菊五郎を発見したのだった。

町内と言っても顔を合わせたことがないが、思わず「音羽やさあん」と声をかけた。

浅黒い顔が振り向いた。

「オヤこれは、お久しゅう。今日はご見物ですか」とニコニコした。

私は驚いた。この六代目の愛想のよさに。そばには小柄な十五六歳ぐらいの男の子が、耕の着物に角帯をしめて附いていた。これが大川橋蔵だったのだ。このニキビだらけの顔は誰の目にも入らなかった。

役者の家はきびしい。修業中の者には冬でも羽織を着せないのか、終電車のデッキで寒そうにちぢこまっていた。誰もかれもお腹はペコペコに空いていた。境川の夜風はこたえた。

だが、芝居小屋が復活すると、その混み合う電車で東京へ出た。

演したものは覚えていないが、鏡獅子が出るという。弁当を作り、並んで切符を買い、やっとの思いで見物した。

六代目はよかった。何ともいえない安らぎで別荘もんは満足した。

それからは、前のように電車では余り会えなくなった。人間国宝の六代目をいたわり、駅長さんが二等車へそっと乗せてあげたという。

また、六代目は鵠沼人の釣り仲間であった。

船宿から江の島あたりで釣っていると、帰りかけた六代目にドスのきいた声で

「よう、釣れましたかい」

と声をかけられ、何だか「芝浜」を見ているような気分になったよと語った。釣り仲間も今はもういなくなった。

あの食糧難の時代に、境川を渡る舟でじっくり釣り糸をたれた名優も、いつの間にかいなくなってしまった。鵠沼で病み、牡丹の花が散るように亡くなられた。それは昭和二十四年七月十日であった。

歌舞伎のあの広い舞台で長唄十挺十枚お
はやしを背に一人で踊りぬき、すきを見せな
い鏡獅子の弥生、後シテの勇壮な踊りは今も
私の目に焼きついている名優である。
あの頃の食糧難はひどかったが、町内みん
なが分け合った。菊五郎一家もハデなことは
なかった。
そんな中に、橋蔵が修業時代鵠沼で受けた
きびしい菊五郎の訓育があの大成をなしたの
だ。
役者の家の礼儀、長幼の序はとてもきびし
く、しっかりしていたのを私は知った。
これは学ぶべきことだとしみじみ思う。
戦争によって、大切な肉親を失った最大の
悲しみの中にも、乏しきに耐え、貧しきに耐
えて、大人も子供も一体になって暮らしてきた。
四十年たって現在を考える。
時代の違いと言い切れるものではない。
根本を考えてみよう。いずれの時代にも自
分に対してきびしさを失ってはならないと強
く思うのである。

（昭和六十年一月十一日記）

「鵠沼を語る会」活動年表
（その２）

伊藤　節堂　編

1983　昭和 58 年 3 月 8 日　午前１０時 和室
1　研究発表　　富士山、 伊藤節堂
2　「鵠沼」通第１３号発行
（内容）
・「鵠」について　　富士　山
・江のしま道しるべ考　　伊藤　節堂
・鵠沼を語る会活動年表　　伊藤　節堂

5 月 10 日　午前１０時　和室
1　研究発表　伊藤　節堂
2　「鵠沼」通巻１４号発行
（内容）
・しおかぜ号の履歴書　　伊藤　節堂

7 月 1 日　人事異動により
館長相沢和夫氏は納税課長代理へ
新館長鈴木好郎氏が藤沢公民館長より

7 月 12 日　午前１０時　和室　出席１７名
1　研究発表　　富士山、　伊藤節堂
2　「鵠沼」通巻１５号発行
（内容）
・芥川龍之介晩年の消息　富士　山
・鵠沼郷土誌年表　　伊藤　節堂
3　この日冨士山氏発議により
会員伊藤節堂を当会の代表とす
ることに全員異議なく決定

9 月 13 日　午前１０時　　和室
1　研究発表　　伊藤節堂、 塩沢　務
2　「鵠沼」通第１６号発行
（内容）
夜明けのカナカナ　伊藤　節堂

・上諏訪神社の震災記念碑　　伊藤　節堂
・幻のクゲヌマランを捜して　塩沢　務

11 月 4 日 鵠沼公民館祭り参加のため、
鵠沼を語る会のコーナーを
設けて飾りつけする　奥田直元　伊藤節堂
クゲヌマランの写真飾りつけ　塩沢務
11 月 5 ～ 6 日　　公民館祭り

11 月 8 日　午前１０時　和室
1　研究発表　伊藤　節堂
2「鵠沼」通巻１７号発行
（内容）
・写真展鵠沼 50 年と私の写真　福地誠一
・掘一族の越後支配時代　伊藤　節堂

12 月 25 日　「鵠沼」昭和５８年合併号を発行

1984　昭和 58 年　1 月 8 日　午後１～５時　学習室
この日会誌「鵠沼」５８年合併号の
製本のため会員有志約１０名が集まり、
主査渡貫洋氏の計画に従って作業を行い、
午後５時までに、１００部の製本を完了した。

1 月 10 日　午前１０時　文化活動室　出席１５名
1　研究発表　　逸見千鶴子　久保尚雄
2　「鵠沼」通巻１８号発行
（内容）
・鵠沼の民俗行事　奥田直元　伊藤 節堂
・野呂栄太郎さんを語る　逸見千鶴子
・神奈川県下外国人遊歩規程測量「測点標石」　久保　尚雄

3 月 13 日　午前１０時　文化活動室　出席１５名

1　研究発表　冨士山　　逸見千鶴子
2　「鵠沼」通巻１９弓発行
（内容）
・龍之介の住んだ二階建ての家について　富士山
・野呂栄太郎さんを語る（2）　逸見千鶴子

5月 8日　午前１０時　文化活動室　出席１２名
1　研究発表　冨士山　　伊藤節堂
2　「鵠沼」通巻２０号発行
（内容）
・芥川龍之介晩年の消息に補正　冨士山
・桜貝と浜木綿について　　冨士山
・鵠沼の文人たちとその旧居　　伊藤節堂
・白樺派の人びと　　伊藤節堂

7月 10日　午前１０時　創作実習室　出席１６名
1　研究発表　富士　山
2　「鵠沼」通巻２１号発行
（内容）
・さくら貝訂正と防風に追加　冨士山
・幻のツキミソウ　　伊藤節堂
・瞥女歌「小栗判官照手姫　　伊藤節堂
・「小栗伝説」の文献比較　　伊藤節堂
7月 23日　人事異動により鵠沼公民館主査渡貫洋氏御所見公民館主査へ、御所見公民館主査天田又之氏鵠沼公民館へ

9月 11日　午前１０時　和室　出席１６名
1　研究発表　冨士山　葛巻左登子　久保尚雄

2　「鵠沼」通巻２２号発行
（内容）
・ハランかスルガランか　富士山
・芥川の鵠沼寓居跡の葉蘭について　葛巻左登子
・災害（天災）略年表　久保　尚雄

11 月 9 日　公民館祭に参加のため鵠沼を語る会のコーナーを設け
飾りつけ　奥田直元　伊藤節堂

11 月 11 日　公民館祭り

11 月 13 日　午前１０時　和室　　出席１９名
1　父松岡静雄を語る　野口喜久子
2　研究発表　伊藤節堂　富士山
3　「鵠沼」通巻２３号発行
（内容）
・第１１番目の「江のしま道しるべ」　伊藤節堂
・鵠沼碑文集（その１８）　伊藤節堂
・神楽舎大人「松岡静雄年譜」　伊藤節堂
・芥川龍之介晩年の消息（補記）　富士山
・月光の女　富士山

1985　昭和 60 年 1 月 8 日　午前１０時　和室　出席１２名
1　研究発表　富士山　伊藤節堂
2　「鵠沼」通巻２４号発行
（内容）
・「鶴」について　富士　山
・大橋流書法の祖「大橋重政に関する年表」　伊藤節堂

（　あとがき　）
ここに、５８年３月から二年間の活動のあと
を振り返りました。それ以前の活動状況については
５２年３月１５日発行の通巻第１３号をご覧下さい。
（　６０・２・１３　記　）

鵠　沼　昭和６０年３月号
通 巻 第 ２ ５ 号

昭和６０年３月１２日発行
編 集・鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸２－１０－３４
鵠 沼 公 民 館 内
電話３３－２００１、２００２